

# 河川基金助成事業

## 「身近な公園—新たに出会う生き物たち—」 報告書

助成番号：2024 - 7111 - 003

東京都葛飾区幼保連携型認定こども園そあ

園長 氏名 稲垣 春子

2024 年度

助成番号	助成事業名		施設名			
2024-7111-003	身近な公園—新たに出会う生き物たち—		幼保連携型認定こども園そあ			
所在地	東京都葛飾区水元 3-13-20	対象河川名	中川			
対象園児	年長 (15人)	活動時間	2時間			
河川教育の目標	雨は川から海に流れ、山に戻り再び川になる。この自然の循環があるからこそ私たちは、自然から恩恵を受けている。授業や言葉で「川は大切」と伝えることも一つであるが、それ以上に、幼少期に川や自然の中で遊び、五感を使って吸収し、子ども自身の経験になって初めて、「川や自然は大切」と本当の意味で伝わる事が出来る。それらの経験の積み重ねこそが将来に渡って自然が好きで大切にできる人を育むのではないかと考えている。					
子どもに育成したい能力	生き物と触れ合う中で魚の触り方や持ち方、育て方等の知識・想像力・声明を尊重する力・表現力・言語能力・自然に関心を持ち自ら関わる力・自然を五感で楽しむ力					
評価の観点	「環境」「表現」「言葉」 環境と表現、言葉の視点から見ると、河川は私たちが生きる上で必要不可欠な水資源の一つであり、自然環境の重要な部分である。身近な環境に触れることで、子どもたちから発する言葉や表現がどのように変化するかを評価することで、子どもたちの自然環境に対する理解や感性を深める姿を浮彫にすることが出来ると考えている。					
学習活動の内容と成果						
<p>[内容]</p> <p>葛飾区内にある西水元水辺の公園のワンド内で水辺の生き物を探索し触れ合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>7月上旬と9月下旬で活動時期を変えて2回活動を行い、それぞれ子どもの姿を比較する。</li> <li>活動前後で活動場所の写真を見ながら3つの質問を行い、子どもの発言を比較する。</li> <li>保護者にアンケートをとり、保護者の視点も含め子どもたちの変化を捉える。</li> </ul> <p>[成果]</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>7月の活動前は、子どもたちの今までの体験から話をしていたが、活動後からは実際に体験したことを踏まえて感じたことや発見したことを話す姿が見られた。川遊びの中で五感を使って遊んだことにより、<u>自然の面白さや川の危険性</u>についても知る事ができたと感じている。</li> <li>7月の活動後の話し合いでは、体験を詳細に話す姿が多かったが、9月の活動後は体験したことだけではなく、今後やりたいことや7月の活動と比較する姿があった。活動を2回行ったことで、次の活動にねらいをもち、期待感を持っていた。</li> </ul>						
河川教育を通じて見られた子どもの変容	<ul style="list-style-type: none"> <li>川遊びでは、「ドロドロしていた」「冷たかった」という意見が出ていた。実際に川に行き、水の中に入ったり干潟での活動を通して川本来の姿を発見する姿が見られた。</li> <li>保護者アンケートでは、7月活動前には期待感を持っているようだったが、9月の活動前には、不安な気持ちを話す姿があった。しかし、9月活動後には、体験したことや感じたことを話している姿が多く、自然の面白さや川の危険性について学ぶことができていた。</li> </ul>					
支援者等 (複数記入可)						
保護者	外部小学校	外部中学校	外部高校	外部大学	市民団体	専門家等
河川管理者	行政機関、博物館、資料館等	関係団体 (漁協、農協) 等		企業	その他	
支援の概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>川の生き物探して、生き物の知識等の園児への指導をしていただいた。(株)生態計画研究所</li> <li>子どもたちと一緒に活動に参加していただいた。保護者</li> </ul>					
成果発表	成果作品			発表方法		
	写真、ポートフォリオ			園内に展示		
今後の課題・展開						
<p>今回、活動時期を変えて2回活動を行い、見られる生き物の違いを知るということも1つのテーマとしていたが、見られた生き物にあまり変化が見られなかった。また、水辺に人が入ると生き物が逃げてしまい捕まえることが難しかった。子どもたちの姿としては、振り返りで出てきたもの以外で釣りや仕掛けを使って魚を捕まえるなどの意見も出ていたため、今後近くの公園などに行って遊びの中で展開していきたいと考えている。</p>						

助成番号	助成事業名	学校名
2024-7111-003	身近な公園ー新たに出会う生き物たちー	幼保連携型認定こども園そあ



学習活動名：活動前の話し合い

日付：6月27日

**[見られた子どもの姿]**

事前に活動場所の写真を子どもたちに出して、保育教諭が3つの質問をした。

**[子どもたちの反応や気づき]**

- 1、どんな生き物が住んでいるか  
「カメ」「魚」「マグロ」「イカ」「クジラ」など
- 2、この場所でどんなことができるか  
「かくれんぼ」「泳ぐ」「魚探し」「浮かぶ」  
「でんぐり返し」「化石、宝探し」など
- 3、この場所の好きなおところ  
「川の中」「水の中」「森の中」「石の下」など



学習活動名：ディフェンシブスイミング（ふかふかキック）  
セーフティートーク（7月）

日付：6月28日

**[見られた子どもの姿]**

初めての河川での活動であったため、安全管理の観点から活動場所について、また、活動中のセーフティートークを行った。また、ライフジャケットの着方や浮き方の練習も行った。

**[子どもたちの反応や気づき]**

セーフティートーク中、子どもたちは真剣な表情で聞いている姿があった。保育教諭が「ここではどこが危ないと思う？」などと問いかけると、「石に頭ぶつける」「泥に埋まって抜けなくなる」などと次々に答えが出てきた。浮く練習中も楽しみながら積極的に参加する姿があった。



学習活動名：川の生き物探し

日付：7月3日

**[見られた子どもの姿]**

石をひっくり返したり茂みの中を探して、必死にカニを追いかけていた。カニを捕まえた子どもたちは、カニの顔やカニの甲羅をじっくりと観察していた。

**[子どもたちの反応や気づき]**

自分が必死に捕まえたカニを観察していた。初めは、「にこちゃんマークみたいだね」と嬉しそうな表情で話していた。その後もじっくりと観察をしていて「カニの目僕たちよりも上についてる」「口はどこだろう」などと、細かいところまで観察する姿があった。

助成番号	助成事業名	学校名
2024-7111-003	身近な公園—新たに出会う生き物たち—	幼保連携型認定こども園そあ



学習活動名：顕微鏡での観察

日付：7月3日

**【見られた子どもの姿】**

最初は、岩場でカニを探していたが、徐々に泥がある方に移動していった。すると、泥に足が埋まってしまい抜けなくなってしまった子どもたち。初めは焦った表情だったが、セーフティトークで話した内容を思い出して、慌てず落ち着いて足が埋まってしまうことも面白がって楽しんでいた。

**【子どもの反応や気づき】**

初めは、泥に埋まってしまい焦った表情で「抜けない」と叫んでいたが、周りの子が落ち着いている様子を見て、徐々にセーフティトークの内容を思い出したのか落ち着いて、足が埋まっていくのを楽しむ姿があった。また、泥の温かさにも気づいた様子があった。



学習活動名：顕微鏡での観察

日付：7月3日

**【見られた子どもの姿】**

ワンド内で見つけた水中昆虫を電子顕微鏡を使って観察を行った。初めはとても小さな生き物が大きく見えていることを不思議に感じている様子があった。顕微鏡をじっくり見て、子どもたち同士で楽しく話している姿もあった。

**【子どもの反応や気づき】**

顕微鏡を使っての観察が初めてだった子どもたちは、小さな生き物が大きく見えることを不思議に感じ、とても興味津々に観察をしていた。「目がキュルキュルしててかわいいね」「こんなに小さいのに目が付いているんだね」などと楽しそうに話す姿があった。



学習活動名：潮の満ち引きの観察

日付：7月3日

**【見られた子どもの姿】**

活動中、潮の満ち引きについての話があったため、活動後、昼食を食べてから活動場所の様子を見に行った。水の量が少し増えていることに気が付いた子どもたち。「さっきより水が増えている」「月が近づいてきてるってことだ」などと話している姿があった。潮の満ち引きについて話を聞くだけではなく、実際に見ることができた子どもたちは、潮の満ち引きに興味を持っていた。

助成番号	助成事業名	学校名
2024-7111-003	身近な公園ー新たに出会う生き物たちー	幼保連携型認定こども園そあ



学習活動名：水辺の生き物観察

日付：9月24日

**[見られた子どもの姿]**

保育教諭が網の使い方を伝えると、片足で泥を掘り網ですくって魚探しをしていた。なかなか捕まえられず苦戦している様子だった。

**[子どもの反応や気づき]**

穴を掘ってすくった網を覗いてみるが、魚がなかなか捕まえられずにいた。「いないね」「難しいね」と話していた。子どもたちは、がっかりした様子はなく、会話を楽しみながら網を使うことも楽しんでいる様子だった。



学習活動名：水辺の生き物観察

日付：9月24日

**[見られた子どもの姿]**

初めは岩場でカニ探しをしていたが、茂みの中に穴があいていてそこにカニがいることが分かった。穴に隠れてしまったカニを捕まえるために、友達と保育教諭と作戦会議をして協力して捕まえた。

**[子どもの反応や気づき]**

茂みの穴の中に隠れてしまったカニを捕まえるために、「先生は逃げないようにあっちにいて」「私がここから捕まえるから」などと一生懸命友達と協力する姿があった。



学習活動名：干潟の砂のろ過実験

日付：9月24日

**[見られた子どもの姿]**

生き物の観察後、干潟の砂を使ってろ過実験を行った。コーヒーフィルターを使ってろ過の実験をしていった。濁っていた水が透明になって落ちてくることに興味津々の様子で見っていた。

**[子どもの反応や気づき]**

ろ過される前の水を見て、「汚れてる」「この水の中に僕たち入ってたの?」と話していた。ろ過されていく水を見て、「透明になってる」「きれいになってる」「なんで?」と驚いている様子だった。



助成番号	助成事業名	学校名
2024-7111-003	身近な公園ー新たに出会う生き物たちー	幼保連携型認定こども園そあ



学習活動名：水辺の生き物観察

日付：9月24日

**[見られた子どもの姿]**

活動後、捕まえた生き物をもとの場所に戻すことになった。必死に捕まえたカニを逃がしたくない気持ちと、「逃がさない」という気持ちで葛藤している姿があった。最後には、もとにいた場所に戻してあげていた。

**[子どもの反応や気づき]**

必死に捕まえたカニを逃がしに行くことになり、いざ逃がそうとすると、寂しくなったのか「バイバイしたくないな」とつぶやいていた。「でも弱っちゃうよ」という友達の話聞いて、自分の中で葛藤しながら最後はお別れすることができた。生き物に愛着が生まれ、生き物の命の大切さに気付いていた。



学習活動名：活動後の話し合い

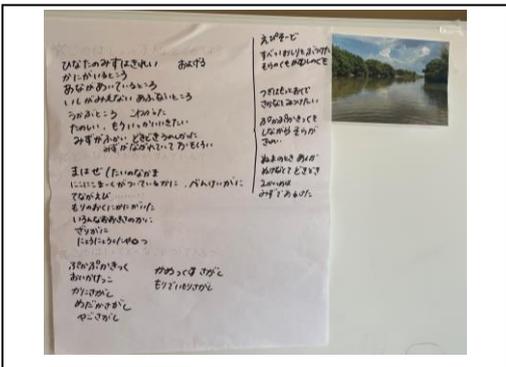
日付：9月25日

**[見られた子どもの姿]**

活動後も、活動前に子どもたちに出した写真と同じものを用意し同じ質問をした。

**[子どもの反応や気づき]**

- 1、どんな生き物が住んでいるか  
「色々な大きさのカニ」「紫のカニ」「貝殻」など
- 2、この場所でどんなことができるか  
「泳ぐ」「カニ探し」「魚を捕まえる」
- 3、この場所の好きなおとこ  
「茂みの中」「水の中」「カニがいるところ」など



学習活動名：活動2週間後の話し合い

日付：10月8日

**[見られた子どもの姿]**

活動2週間後も、活動前に子どもたちに出した写真と同じものを用意し同じ質問をした。

**[子どもの反応や気づき]**

- 1、どんな生き物が住んでいるか  
「マハゼ」「ベンケイガニ」「テナガエビ」など
- 2、この場所でどんなことができるか  
「ぶかぶかキック」「カニ探し」など
- 3、この場所の好きなおとこ  
「きれいな水」「カニがいるところ」「水が深いところ」

助成番号	助成事業名	学校名
2024-7111-003	身近な公園—新たに出会う生き物たち—	幼保連携型認定こども園そあ



学習活動名：絵に描く

日付：10月8日

〔見られた子どもの姿〕

楽しかったことや見つけた生き物を絵に描いた。絵を描きながら活動時のことを振り返ったり、絵の説明をしながら描く姿があった。

〔子どもの反応や気づき〕

絵を描きながら「ベンケイガニがいたんだよね」「ここら辺に石があって、カニがたくさんいたよね」などと楽しそうに話す姿があった。また、子ども一人ひとりの絵を見ていくと、同じ絵はなくそれぞれの視点から描いていた。

2024 年度 7 月

# 河川活動記録

活動実施日 2024 年 7 月 3 日

活動場所 西水元水辺の公園

実施園 認定こども園そあ

対象園児 5 歳児

作成者 桂本佳奈

## 7月かわせみの日 西水元水辺の公園活動計画書

日時 2024年7月3日(水) 8:30~14:30 予備日 7月4日(木)  
場所 西水元水辺の公園  
東京都葛飾区西水元3丁目1地先から西水元1丁目5地先まで  
目的 水辺の生き物の観察  
対象児 5歳児14名予定  
引率 桂本、平田、今井、井辻、小山、上田(すなはら)  
ひろかず先生、高橋さん、吉本さん(母)

### 持ち物(園児)

リュック、水筒(リュックの中に入れてくる)、レジャーシート、おしぼり、おにぎり、長袖、半袖、長ズボン、着替え一式(パンツ、靴下を含む)、タオル、汚れても良い靴(ウォーターシューズやサンダル等は足底が薄いため、運動靴)、運動靴(履き替え用)、ビニール袋(汚れものを入れる用)、軍手(滑り止め付きを推奨しています)

### 持ち物(園)

タンク2個、テント、ブルーシート、大人軍手、水網4個、移植ごて9個、顕微鏡2セット、iPad、虫除けスプレー、蚊取り線香、チャッカマン、ライフジャケット14着(子ども用)ライフジャケット10着(大人用)、スローロープ1個、タオル、バケツ、緊急時用の水、机、クーラーボックス

### スケジュール

時間	子どもの動き
9:00	園出発
10:30	活動開始 生き物の観察、探索 ① 潮の満ち引きの話 ② 肉眼で干潟の観察 ③ 水辺の生き物を網や手、移植ごてで採集(カニ等)、仕掛け確認 ④ 採集した生き物観察(顕微鏡等)
11:50	探索終了
	振り返り
12:00	片付け、着替え
	昼食
14:30	帰園予定

## 河川活動の考え方

雨は川から海に流れ、山に戻り再び川になる。この自然の循環があるからこそ私たちは、自然から恩恵を受けている。授業や言葉で「川は大切」と伝えることも一つであるが、それ以上に、幼少期に川や自然の中で遊び、五感を使って吸収し、子ども自身の経験になって初めて、「川や自然は大切」と本当の意味で伝わる事が出来る。それらの経験の積み重ねこそが将来に渡って自然が好きで大切にできる人を育むのではないかと考えている。

## 活動前

### 6月27日（木）「7月活動前の話し合い」

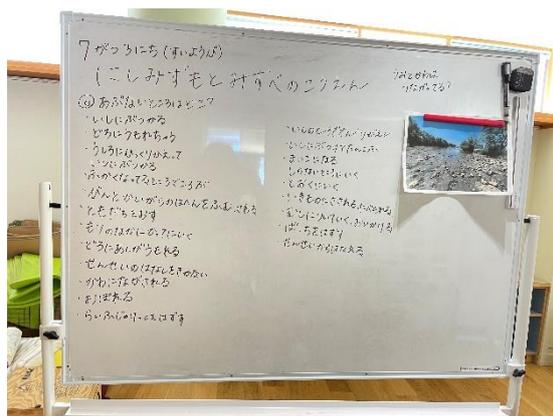
7月の活動前、活動場所の写真を見せて、「どんな生き物が住んでいるか」、「この場所でどんなことができるか」、「この場所の好きなところ」の3つの質問をした。

どんな生き物が住んでいるか、どんなことができるのかという質問に対しては、「サメ」や「まぐろ」、「宝探し」や「潜る」など自信満々に答える姿があった。好きなところの質問に対しては、はじめは「難しいよ」「わかんないよ」と話していたが、Eくんが「水の中には魚とかたくさんいて面白そう」と話をすると、「石の下とか?」「森の中とか?」などと少し不安そうに答える姿が見られた。



### 6月27日（木）写真を見て活動場所の危険性を考える

活動場所の写真を見て、どのような場所が危険なのか、どのような危険があるのかを考えた。「この写真を見て、どんなところが危ないと思う?」と問いかけると、「石のところで転ぶ」「川に流される」「泥に足が埋もれる」などと答える姿があった。活動場所には行ったことがないため、イメージが付かず、答えるのが難しいと思っていたが、写真から分かる情報を集めて子どもたちなりに考える姿が見られた。



## 6月28日（金）ライフジャケットを着てディフェンシブスイミングの練習

実際にライフジャケットを着て、ディフェンシブスイミング（ぶかぶかキック）と回る練習を行った。川に流されてしまったとき、水に浮くときには顔を水面から出して足を上にあげること、顔が水についてしまっても慌てず回転するということを合わせて伝えた。子どもたちの様子としては、真剣に話を聞く様子があり、実践では遊び感覚で楽しんで取り組んでいた。また、友達や保護者にディフェンシブスイミングを実践して見せたり、川の中で気をつけることなどを伝える姿もあった。



## 7月2日（火）活動前日セーフティトーク

活動前日、5歳児にセーフティトークを行った。川の危険性やライフジャケットの使い方、活動場所や活動内容について話をした。普段の散歩で水辺に行く際、川の危険性について話をしていたこともあり、子どもたちの方から「流される」「溺れる」「ライフジャケットを着る」などの話が出ていた。子どもに伝えた主な内容は、「活動場所は泥沼になっていて足が抜けなくなってしまうことがある。困ったら大人に声をかけること」、「流れてきたゴミやロープなどが落ちているため、触らないこと」、「流されたときや水に浮くときは、ディフェンシブスイミング（ぶかぶかキック）をすること」、「困ったことがあったら、落ち着いて大人に声をかけたり、笛を吹いて呼ぶこと」などを伝えた。

## 活動中

### 7月3日（水）活動当日 エピソード1 「カニの家はどこ？」

「石の近くにカニがいるかもしれない」ということを教えてもらった子どもたち。あたりを見回すが、カニが見つからない。そこで、Sくんが石をひっくり返してみると、すばしっこいカニがいるのを発見した。「いた！！」と大興奮の子どもたち。EくんとSくんは、「大きな石の下にたくさん隠れてるはず」と言って協力して捕まえようとする。1人は石を持ち上げる、もう1人はカニを捕まえるというように役割分担をしていた。カニの家を知った子どもたちは必死に追いかけて捕まえていた。



### 〈考察〉

「カニがいるかもしれない」ということを聞いて、はじめは石の上や石の間を探していたが、なかなか見つからなかった。そこで自分なりに考えて石をひっくり返してみると1

匹のカニを発見した。次に、大きな石の下にはたくさんいるはずと考えて、友達と協力して探していた。体験の中で、「こうかもしれない」「次はこうかもしれない」というように次々に考えて挑戦することで、新たな発見があり次の新しいことへの挑戦へとつながっていくのだと考えられる。

### 7月3日（水）活動当日 エピソード2 「カニの観察」

すばしっこいカニに苦戦していたRくん。やっとの思いで捕まえることができた。カニをケースの中に入れてじっくり観察をしていた。すると、「カニに模様がある！」ということに気付く。水元かわせみの里の職員（以下Aさん）からは、「ベンケイガニっていう種類のカニだよ。ベンケイガニには顔みたいな模様がついているんだよ」と教えてもらった。Rくんは、「にこちゃんマークみたいだね」と嬉しそうな表情でつぶやいていた。その後も、「カニの目、僕たちよりも上についてる」「口はどこだろう」「なんかかわいい顔してるね」などとじっくりとカニの観察をする姿があった。



#### 〈考察〉

Rくんは、必死に捕まえたカニを大事そうに持っていたり、じっくり観察するなど愛着が芽生えている様子だった。捕まえるだけで終わるのではなく、カニに触れたり、じっくり観察したりする中で、生き物の特徴や命の大切さ、生き物に触れることの面白さに気付くことができていた。また、カニの顔を観察し、自分自身と比較することでカニの特性や人間との違いにも気付いていた。

### 7月3日（水）活動当日 エピソード3 「お母さんも必死になってカニ探し」

今回の活動に5歳児の保護者の方も参加してくれた。活動が始まると、はじめは「あっちにいるよ」「そこにいたよ」と子どもたちの様子を見守りながら声掛けをしていたが、気付けば子どもたちと一緒に必死にカニ探しをして遊んでいた。石をひっくり返して「いた！！」「逃げられた」と必死に探して、手づかみでカニを捕まえていた。



### 〈考察〉

はじめは、子どもたちの様子を見守りながら一歩引いて活動に参加していた。保護者から出てくる言葉も、はじめは子どもを見守るような声掛けだったが、徐々に保護者自身が主になって遊んでいる言葉が多く出てきていた。活動後、保護者からは「いつの間にか自分が楽しく遊んでいた」「こんな体験を子どものときにできるのはとてもいいですね」などという話があった。保護者も活動に参加し、共通体験をしたことで川遊びの面白さ、自然体験の大切さに気付くことができたのではないかと考えられる。

### 7月3日(水) 活動当日 エピソード4 「足が抜けない！」

カニや魚探しをして遊んでいたEくん。「足が抜けない！」と焦っていた。そこへ、Hくんが来て、「わー一足が埋まっていー」と面白そうに話していた。その様子を見て、Eくんも「なんか泥の中あったかい」「足が埋まっていーの面白い」と笑いあっていた。その後も2人は、泥に足が埋まっていー感覚を楽しんでいた。



### 〈考察〉

活動前、子どもたちには「ワンド内は泥があり足が埋もれて動けなくなることがあるかもしれないが、慌てないこと」と話をしていた。実際に、Eくんは泥にはまり、初めは焦っている様子があったが、泥に埋まっていーことを冷静に楽しんでいるSくんの姿を見て、落ち着くことができ、面白さにも気付いたのだと考えられる。活動場所について、前もって話をしていたことで、子どもたちはピンチも冷静に乗り越え、面白さに気付くことができたのではないかと考えられる。

### 7月3日(水) 活動当日 エピソード5 「顕微鏡で観察」

活動場所で捕まえた水中昆虫を顕微鏡で観察した。「目がキュルキュルしててかわいいね」「こんなに小さいのに目がついてるんだね」などと水中昆虫の特徴をそれぞれ話していた。また、顕微鏡を見て不思議に思ったEくんが、「なんでこんなに小さいのに大きく見えるんだろうね」と不思議そうにしていると、Uくんが「顕微鏡は小さいものを大きく見せてくれるやつなんだよ」と伝える姿があった。



### 〈考察〉

今回、年長にとって初めて顕微鏡を使用して生き物を観察した。初めて使う道具に興味津々の様子であった。肉眼での観察よりもよく見えるため、子どもたちもより細かいところまで観察していた。家ではなかなか触れることのない道具に触れることで様々な興味へとつながっていくのではないかと考えられる。

### 7月3日(水) 活動当日 エピソード6 「水が増えてる！」

活動中、Aさんから潮の満ち引きについて簡単に話があった。そのため、昼食後、保育教諭が「川の水どうなってるかな」と子どもの近くでつぶやいた。子どもたちは「見に行ってみる」と言って活動場所に戻る。すると、「さっきより水が増えてる」「月が近づいてきてるってことだ!」「これからもっともっと増えていくってことだよね」などと話す姿があった。



### 〈考察〉

子どもたちは、潮の満ち引きについての話の中で、質問をしたり、真剣に聞く姿があった。そのため、潮の変化が実際に見られればと考え、「川の水どうなってるかな」と子どもたちのそばでつぶやいた。潮の様子を見て、変化に気付いたり、下線部のような発言から、聞いた話と実際に見たことが結びついているのだと考えられる。

### 活動後

#### 7月4日(木) ふりかえり

活動の翌日に、振り返りを行った。初めに、感想を聞いてみると、「カニが速くて捕まえるのが難しかった」「石をどかしたらたくさんカニがいた」などと一人ひとりが楽しそうに話をしていた。次に、活動前にも問いかけた3つの質問をした。「どんな生き物が住んでいるか」という質問に対して、活動前は「サメ」や「マグロ」など知っている名前が出てきたが、活動後は「ベンケイガニ」や「テナガエビ」「クロダハゼ」など見つけたものの名前を具体的に話していた。「好きなどころ」の話では、活動前は「石の下」「森の中」など写真を見てわかることを話していたが、活動後は「カニがいたところ」「魚がいたところ」など写真の情報以外のものも多く出てきた。また、振り返りの中で子どもたちに活動中のエピソードを聞くと、「泥に足が埋まって抜け出せなくなった」「カニが速くて捕まえるのが難しかった」などと話す姿も見られた。

## 7月4日（木）園内掲示

活動翌日、活動中の写真や実際に話していた子どもの言葉などを用いて、園内に掲示した。昨年から始まった活動で、保護者自身も川での活動経験が少なく、想像するのが難しいと考えたためである。

掲示をすると、帰り際に保護者と一緒に見ながら「石の下にカニがたくさんいたんだよ」「ライフジャケット着たんだよ」などと説明をする姿が多く見られた。また、「次も早くいきたい」「次は水があるときに行くんだよね」などと次回の活動を楽しみにする声も上がっていた。



表1 子どもたちにした3つの質問と子どもたちの反応

質問	活動前	活動直後
①どんな生き物が住んでいると思うか	カメ 魚 蛹 ザリガニ メダカ うなぎ カニ サメ 金魚 エビ マグロ クジラ マンボウ カエル イカ ヤゴ オタマジャクシ	ベンケイガニ テナガエビ クロダハゼ 魚 鳥 蝶々 タニシ ハチ アメンボ 赤虫 水中昆虫
②この場所でどんなことができるか	・かくれんぼ ・泳ぐ ・もぐる ・イルカの真似 ・化石、宝探し ・魚探し ・浮かぶ ・石の上に乗る ・でんぐり返し	・カニ探し ・魚探し ・エビ探し ・カニの観察 ・泥の中で泡が見られる ・茂みの中を探す
③この場所の好きなところは	・川の中 ・水の中 ・橋があるところ ・トンネルがあるところ ・橋と町がつながっているところ ・森の中 ・石の下	・カニがいるところ ・石の下 ・水があるところ ・石がたまっているところ ・魚がいたところ ・石の形 ・泥の中

### 〈3つの質問の考察〉

活動前での3つの質問に対して、子どもたちは「マグロ」や「サメ」、「宝探し」や「潜る」など次々に意見を出していた。「どんな生き物が住んでいるのか」「どんなことができるのか」についての質問に対して次々に答えが出てきたのは、図鑑やテレビ、水族館などで見たことがあったり、実際に園にいる生き物たちを見ているためだと考えられる。また、好きなどころについての質問に対しては、不安そうに答える姿があった。それは、行ったことのない場所でイメージするのが難しかったからだと考えられる。

活動後は、「ベンケイガニ」や「テナガエビ」など生き物の名称や特徴を詳しく話す姿があった。活動後から振り返りまでの間で、川からの帰り道に友達や保育教諭と活動の話をしたり、家に帰ってから保護者に話をする姿があった。体験を自分の言葉にして誰かに伝えるということを繰り返し行うことで、子どもたちの記憶に残っていくのである。また、この場所の好きなどころについては「カニがいるところ」「水があるところ」「魚がいたところ」などを自信満々に答える姿があった。写真で見ていた場所に実際に行って、それぞれがお気に入りの場所を見つけることができていた。

振り返りの数日後にも、園内掲示を見て保護者や友達に活動中のエピソードや見つけた生き物の名前を話す姿や、日常の会話の中で「川に行ったの楽しかったね」「カニたくさん捕まえたよね」「次はカニたくさん捕まえない」などと話す姿も見られた。子どもたちにとって川の活動は、とても印象の強い体験だったのだと考えられる。

### 〈総合考察〉

今回、実際に川に行って生き物に触れたり、潮の満ち引きの様子を見たりする中で、図鑑やテレビを見たり、話を聞くだけではできない体験ができたのではないかと考えている。エピソード1では、「川にはカニがいるかもしれない」ということを初めから聞いていたが、実際に行って自分自身で必死に見つけることができたからこそ、さらに「こうかもしれない」「もっとこうしたい」と考えが浮かんできて、また新たな挑戦へとつながっていったのではないかと考えられる。また、エピソード2では、自分が必死に捕まえたカニに対して愛着が生まれ、実際に触れて観察をしていたため、カニの特性に気付くことができたのではないかと考えられる。エピソード4では、潮の満ち引きについて話を聞いた後に実際に川の様子を見て、違いに気づいていた。話を聞いたことを実際に目で見たり体験することで子どもたちの記憶に残っていくのではないかと考えられる。そして、実際に体験したことを自分の言葉で他者に伝えることを繰り返しすることで記憶に残り、経験へとつながっていくのであることが分かった。

また、今回の活動を通して川遊びの面白さだけではなく、危険性についても知ることができたと考えている。普段から安全管理については職員間でも話をしていて、今回も職員で活動場所の危険性についても話をしてきた。そのため、子どもたち自身も危険性を知ることができるように、活動場所の危険性を一緒に考えたり、セーフティトークを行った。もちろん

ん保育教諭が安全を守ることが大前提であるが、子どもたち自身も自分で自分の身を守るために、川の危険性を知るきっかけになったのではないかと考えられる。

#### 〈今後の課題と展開〉

今回、干潮時での生き物の探索を目的としていたが、カニ以外の生き物を子どもたちが捕まえるのは難しかった。川にはどんな生き物が住んでいるのかななどを図鑑や絵本を使って調べたり、実際に近くの公園に行って探索をしたりしていきたいと考えている。また、潮の満ち引きについても興味が出てきているため、9月の満潮時での活動を通して、干潮時と満潮時の水量や見られる生き物の違いがあるのかについても展開していきたい

2024 年度 9 月

# 河川活動記録

活動実施日 2024 年 9 月 24 日

活動場所 西水元水辺の公園

実施園 認定こども園そあ

対象園児 5 歳児

作成者 桂本佳奈

## 9月かわせみの日 西水元水辺の公園活動計画書

日時 2024年9月24日(火) 8:30~14:30 予備日 9月25日(水)  
場所 西水元水辺の公園  
東京都葛飾区西水元3丁目1地先から西水元1丁目5地先まで  
目的 水辺の生き物の観察  
対象児 5歳児11名予定  
引率 桂本、紺野、入江、井辻、千葉、辻、高橋(すなはら)  
ひろかず先生、高橋さん、君羅さん(父)

### 持ち物(園児)

リュック、水筒(リュックの中に入れてくる)、レジャーシート、おしぼり、おにぎり、長袖、半袖、長ズボン、着替え一式(パンツ、靴下を含む)、タオル、汚れても良い靴(ウォーターシューズやサンダル等は足底が薄いため、運動靴)、運動靴(履き替え用)、ビニール袋(汚れものを入れる用)、軍手(滑り止め付きを推奨しています)

### 持ち物(園)

タンク2個、テント、ブルーシート、大人軍手、水網4個、虫除けスプレー、蚊取り線香、チャッカマン、ライフジャケット11着(子ども用)ライフジャケット11着(大人用)、スローロープ1個、タオル、バケツ、緊急時用の水、机、クーラーボックス

### スケジュール

時間	子どもの動き
9:00	園出発
10:30	活動開始 生き物の観察、探索 ⑤ 7月の振り返り、潮の満ち引きの話 ⑥ 水に浮く練習 ⑦ 水辺の生き物を網や手、移植ごてで採集(カニ等)、仕掛け確認 ⑧ 採集した生き物観察(顕微鏡等)
11:50	探索終了
	振り返り
12:00	片付け、着替え
	昼食
14:30	帰園予定

## 河川活動の考え方

雨は川から海に流れ、山に戻り再び川になる。この自然の循環があるからこそ私たちは、自然から恩恵を受けている。授業や言葉で「川は大切」と伝えることも一つであるが、それ以上に、幼少期に川や自然の中で遊び、五感を使って吸収し、子ども自身の経験になって初めて、「川や自然は大切」と本当の意味で伝わる事が出来る。それらの経験の積み重ねこそが将来に渡って自然が好きで大切にできる人を育むのではないかと考えている。

## 活動前

### 8月30日（金）7月の活動の振り返りと9月の活動についての話し合い

9月の活動前に、7月の振り返りを行った。「どんなことをしたのか」「どんな生き物が見つかったのか」について話をした。初めは、「ライフジャケット着たよね」「川に行った」などと大まかな内容を話していた。次に、写真を見せながら進めていくと、「カニが速くて捕まえるのが難しかったよね」「エビの観察をしたよね」「テナガエビだっけ？」などと、具体的な内容を話す様子があった。1か月以上前のことになるため、記憶が薄れていたが、写真を見ながら振り返ったことによって思い出すことができていた。

そして、9月の活動についても話をした。満潮時での活動になることを伝えると、「ぶかぶかキックできるよ」「魚いるかな？」などと楽しみにする姿があった。また、「水があるってことは、月が近いときにやるってこと？」と前回の活動で教えてもらったことを口にする子どももいた。

### 9月5日（木） 写真を見ながら活動場所の危険性を考える

7月と違うところは何かと子どもたちに問いかけると、「水があること」と答えた。今回は、満潮時の活動場所の写真を見ながら危険性を考えた。「危ないこと、危ないところはどこ？」と聞くと、「水があるから溺れる」「横に川が流れてるから流される」「泥に足がはまっちゃう」などの意見が出てきた。一度行ったことのある場所であるため、7月に聞いた時よりも、より具体的な内容が出てきた。

### 9月12日（木）ディフェンシブスイミング（ぶかぶかキック）の練習

7月の活動前にもディフェンシブスイミング（ぶかぶかキック）の練習を行ったが、繰り返し伝え続けることが重要だと考えたため再び行った。「水に浮くとき、流されたときはどうするんだっけ？」と聞くと、「ぶかぶかキック！」と自信満々に答える。「流れていく方に足を向けるんだよね」と子どもたち同士で話をしながら取り組む姿があった。



## 9月20日（金）活動前のセーフティトーク

7月に話した内容を繰り返し伝えた。7月から伝えている内容であるため、子どもたちに「こういう時はどうするんだっけ？」などと問いかけながら話をした。普段発言する機会が少ない子も、問いかけてみると自分なりの考えを発言する姿があった。また、連休明けでの活動となるため、「睡眠をとって体調を整えてくること」「朝ごはんをきちんと食べてくること」を子どもと保護者に伝えた。

### 活動中

活動当日にライフジャケットを着用している様子



## 9月24日（火）活動当日 水に慣れる、水に浮く練習

活動に入る前に、水に慣れるために7月から何度も練習してきたぶかぶかキックを使って水に浮く練習を行った。水に入ると、「冷たい」「怖い」「ドロドロだ」と様々な声があがっていた。初めは、顔が強張っている子が多かったが、職員が隣で見本を見せたり、手をつなぎながら一緒にやってみると、水に浮くことができ、表情も明るくなっていった。水に慣れると、浮くことが楽しくなったのか、ずっと浮いていたり、浮いたまま移動したりする姿もあった。



### 〈考察〉

活動の1週間前頃から、「水が怖い」「溺れちゃうかも」と少し不安を訴える子ども何人かいた。活動の最初も恐る恐る水の中に入っていき子や、「怖い」と口にする子がいた。しかし、その感情は決して悪い感情ではなく、危険性を知っているからこそ出てくる感情だと考えられる。「怖いからやらない」では、川遊びは怖いものという認識で終わってしまうが、どうしたらできるのかを考え、実際に体験することで楽しさも知ることができた。今回の子どもたちも、はじめは「怖い」と思っていたが「大人と一緒にいたら入れそう」「友達がいれば大丈夫」などと自分たちなりに考え、体験し川遊びの楽しさを知っていった。また、いきなり活動に入るのではなく、水に慣れる時間というスモールステップを作ったことで、不安があった子どもより積極的に活動に参加することができたと考えられる。

### 9月24日(火) 活動当日 エピソード1 「魚探し」

網を使って魚探しをするMちゃんとSちゃん。片足で泥を掘り、網ですくって見てみましたが、魚はいません。2人は網を覗きながら、残念な表情を見せると思いきや笑顔で「いないね」「むずかしいね」と言い合います。こぼちゃん(かわせみの里の職員)は、「魚は逃げ足が速いんだよね」「みんながいると怖くて逃げちゃうのかもね」と教えてくれた。Mちゃん、Sちゃんは魚は見つからなかったけれど、必死に魚を探したり、笑顔で会話を楽しむ姿があった。



### 〈考察〉

はじめは真剣な表情で魚探しをしていたSちゃんとMちゃんだったが、なかなか見つからなかった。網を使っての魚探しは大人でも難しかったため、2人は難しすぎて楽しめないのではないかと、途中で嫌になってしまい諦めてしまうのではないかと考えていた。しかし、笑顔で笑いあっている姿から、子どもにとって魚を捕まえることだけではなく、網を使うことや友達と一緒に活動することも遊びの一つになっているのだと考えられる。大人は、成功に導けるように考えてしまうが、子どもたちにとっては結果が失敗であってもその過程を楽しんでいたり、過程から様々なことを学んでいる。結果ばかりにこだわらず、過程を大事にしていきたい。

## 9月24日(火) 活動当日 エピソード2 「カニ探し」

7月でもカニがたくさん見つかった石のところを率先して探す子どもたち。なかなか捕まえられずに悔しそうな表情を浮かべていた Y ちゃんと S ちゃんに、保育教諭が茂みの方を指さして「こっちの方にもいるかもしれないね」と声をかけた。行ってみると、カニが歩いているのを見つけた。捕まえようとする、穴の中に逃げられてしまった。穴の中を覗いてみると、「たくさんいる。カニの家だよ」と S ちゃんが言う。Y ちゃんと S ちゃんはそれぞれカニを追いかけるがなかなか捕まえられなかった。そこで、保育教諭と Y ちゃん、S ちゃんの3人で協力して捕まえることにした。保育教諭と S ちゃんで行き止まりを作ったところを Y ちゃんが捕まえる作戦で動くと、何とかカニを捕まえることができた。協力して捕まえた2人は、達成感を感じた様子だった。また、Y ちゃんは「7月たくさん捕まえられたのに難しかった」「S ちゃんがいてくれたから捕まえられたよ」などと話していた。



### 〈考察〉

Y ちゃんは、はじめは全くカニが捕まえられず「つまらない」と話していた。石がたくさんある方では、他の子どもたちがカニを捕まえていたため、半分諦めた様子だった。そこで保育教諭が他の場所に誘い、カニを見つけることができると、顔色が変わり必死に追いかけていた。カニが捕まえられると、とても嬉しそうな表情で S ちゃんに感謝の言葉をかけたりしていた。初めの悔しい気持ちがあったからこそ、捕まえられたときにとびっきりの笑顔が出てきたと考えられる。自然体験の中では、うまくいかないこともたくさんあるが、そのモヤモヤとした感情が、うまくいったときにより楽しく、うれしい気持ちにさせてくれるのだと考えられる。

### 9月24日(火) 活動当日 エピソード3 「1番に捕まえた！」

活動当日、5歳児の保護者が参加してくださった。活動の最初から子どもの目線に立ち、夢中になって遊んでいた。生き物探しが始まり、子どもたちがカニや魚を探している中、「捕まえた！」という声が聞こえてきた。振り返ると、大きなカニを持ったお父さんが嬉しそうな表情で立っていた。お父さんが捕まえた姿を見ていた子どもたちも必死にカニを追いかける姿があった。



#### 〈考察〉

今回、お父さんが子どもと一緒に夢中になって遊んでいたため、その姿を見た子どもたちも必死にカニを追いかけたり、一緒に楽しむ様子が見られた。大人が楽しそうに遊んでいる姿を見て、子どもたちが新たな面白さに気付いたり、より楽しむことができると感じた。また、大人自信が川遊びの面白さに気付くことで、家庭で川遊びのような大切な体験をする機会が増えていくのではないかと考える。

### 9月24日(火) 活動当日 エピソード4 「川の水のろ過」

水辺での生き物観察後、コーヒーフィルターを使って川の水のろ過実験を行った。ペットボトルに入っている濁った水を見て、「汚れてる」「この水の中に入ったの？」と話す子どもたち。実験が始まり、ろ過された水を見てみると、「透明になってる」「きれいになってる」「なんで？」と驚いた様子。生き物に触れるだけではなく、山から流れてきた水はろ過されてきれいになって流れてきていること、そして干潟の泥の役割についても知ることができた。園に帰ってから友達や保育教諭に話す姿も見られた。



#### 〈考察〉

子どもたちは、ろ過の実験を見たのが初めてだったからか、不思議そうにいつもよりも集中して話を聞いていた。干潟の泥の役割について他者に自分の言葉で話している姿から、教えてもらったことをきちんと理解しているのだと考えられる。様々なことに疑問を持ち、「なぜ」を考えたり、教えてもらうだけでなく、自分の言葉にして相手に伝えることでよ

り自分自身の理解が深まり、体験が経験へとつながっていくのではないかと考えられる。

## 9月24日(火) 活動当日 エピソード5 「カニの命」

活動後、捕まえた生き物をもとにいた場所に戻してあげることにした。必死にカニ探しをしていたRくんは「バイバイしたくないなー」と話していた。そこで、Uくんが「でもカニのおうちに帰してあげないと弱っちゃうよ」と話す。それを聞いたRくんもわかっているが一生懸命捕まえたカニを逃がしたくないという思いもあり、葛藤していた。Rくんはしばらく、カニとお別れするのを惜んでいる様子だったが最終的には「カニさんバイバイ」と一言つぶやいて、もとにいた場所に帰してあげた。



### 〈考察〉

Rくんは、「必死に捕まえたカニを逃がしたくない」という気持ちと、「かわいそうだから逃がしてあげないと」という気持ちで葛藤していた。最終的に、逃がすことに決めたのは、川の活動を通して実際に生き物に触れたことで生き物の命の大切さにも気付くことができたからではないかと考える。「生き物の命は大切」という言葉はよく子どもにも伝えていることではあるが、Rくんは実際に生き物に触れて自分の中で葛藤したことで本当の意味で「生き物の命の大切さ」に気付くことができたのではないかと考えられる。

### 活動後

#### 9月25日(水) 活動翌日 振り返り①

活動の翌日、活動中の写真を見ながら振り返りを行った。感想を聞いてみると、「ぶかぶかキックが水の中だと難しかった」「大きいカニとか小さいカニがいた」「水がきれいになっていくのが面白かった」などと、次々に笑顔で話していた。

また、活動前にも行った3つの質問をした。「好きなところ」については、「虫がたくさんいた茂みの中」「水の中」「カニがたくさんいたところ」などをあげていて、それぞれが活動の中で自分のお気に入りの場所を見つけられている様子だった。また、「どんな生き物が住んでいるか」については、「中がきらきらしていて、外が茶色の貝殻」「紫色のカニ」「にここマークのカニ」など、生き物の特徴を具体的に話す姿があった。



## 10月8日（火） 絵に描く

活動 2 週間後の振り返り後、楽しかったことや見つけた生き物を絵に描いた。絵を描きながら、「ベンケイガニがいたんだよね」「ここら辺に石があって、カニがたくさんいたよね」などと、当日のことを思い出し、友達と話を楽しんでいる姿があった。



### 〈考察〉

子どもたち一人ひとりの絵を見てみると、見つけた生き物やエピソード、水の絵などそれぞれのイメージが描かれていた。同じような絵はなく、子どもたちの中で印象に残ったこと、楽しかったこと、そして水辺のイメージがそれぞれ違っていることが分かった。活動から少し時間があいたが、すらすらと当日のことを話しながら描いている姿から、子どもたちにとって川での活動は、とても印象が強く、楽しかった思い出となっているのだと考えられる。

表1 子どもたちにした3つの質問と子どもたちの反応

	活動前	活動直後	活動から2週間後
①どんな生き物が住んでいると思うか	カニ 魚 エビ カエル イルカ テナガエビ 猫みたいなカニ 蛇 シャチ セミ ウミヘビ ウーパールーパー カメ ザリガニ メダカ クロダハゼ	魚 色々な大きさのカニ 紫のカニ 貝殻 (中がキラキラ、外が茶色) 水虫 小さいカニ	マハゼ ベンケイガニ テナガエビ カニ ザリガニ によろよろした生き物
②この場所でどんなことができるか	・泳ぐ ・プール ・水をパシャパシャする ・カニ探し ・潜る ・ゴーグル、シュノーケルをつける ・クロール ・バタ足 ・ぶかぶかキック ・浮く	・泳ぐ ・石を転がす ・くるくる回る ・カニ探し ・クロール ・魚を捕まえる	・ぶかぶかキック ・追いかけてこ ・カニ探し ・メダカ探し ・ヤゴ探し ・カメ探し ・イモリ探し
③この場所の好きなところは	・草があるところで生き物探し ・カニがいた草のところ ・水の中に魚がいるところ ・きれいな砂があるところ ・水の中	・茂みの中 ・きれいな砂 ・水の中 ・カニがいるところ ・ぶくぶくしているところ	・きれいな水のところ ・カニがいるところ ・穴が開いているところ ・浮かべるところ ・水が深いところ ・水が流れているところ ・泳げるところ

### 〈3つの質問の考察〉

活動前での3つの質問に対して、子どもたちは「ウーパールーパー」や「シャチ」など知っている生き物の名前を出す姿があったが、「テナガエビ」や「クロダハゼ」など7月の活動時に見つけた生き物の名前も出てきていた。7月の活動後から少し時間が空いていたが、スムーズに答えることができたのは、3つの質問の前に活動時の写真を見ながら振り返りを行ったことが効果的だったと考えられる。

活動後の質問に対しては、全員の子どもたちが楽しそうに答えていた。「色々な大きさのカニ」「紫のカニ」「中がキラキラで、外が茶色の貝殻」など、見つけた生き物の特徴を詳細に話す姿があった。全体で振り返りを行ったのは活動翌日であったが、活動直後の昼食時やこども園までの帰り道で、友達や職員と活動時のことを話したり、帰宅後保護者に話す姿があったため、翌日でも自分が見つけた生き物の特徴を鮮明に覚えていた。

活動2週間後でも、ほとんどの子どもたちが発言していた。9月の活動のことだけではなく、7月の活動時のことも合わせて発言する姿から、子どもたちにとってとても印象が強く、日経っていても記憶が残る体験であったことが分かる。また、体験したことだけではなく「次にやりたいこと」を話す姿もあった。活動が2回あったことで、子どもたち自身が次のねらいを持っていて、期待感が膨らんでいるのだと考えられる。

### 〈総合考察〉

9月に実際に川の中に入っている活動中、「冷たい」「くさい」「ドロドロしてる」などの言葉が子どもたちから出てきていた。子どもの発言から、活動の中で五感を使った体験をしていることが分かった。また、9月の活動後に7月のことを話していたり、見つけた生き物の名前や特徴を詳細に話す姿から、視覚の情報だけではなく、川遊びのような五感を使った体験は子どもたちにとってとても魅力的であり、記憶に残る体験であったのだということが分かる。このことから、子どもたちにとって五感を使って遊ぶことのできる川遊びの体験は、多くの学びがあり、大切な経験なのだと考えられる。

そして、川遊びを楽しむ中で「水が怖い」「水が深くてドキドキした」「浮かぶところが怖かった」などと話している姿があり、川の危険性についても学んでいた。実際に川に行って体験することは、生き物に触れたり面白さに気付けるだけではなく、危険性についても学ぶことができるとても貴重な体験だということが分かった。

### 〈今後の課題と展開〉

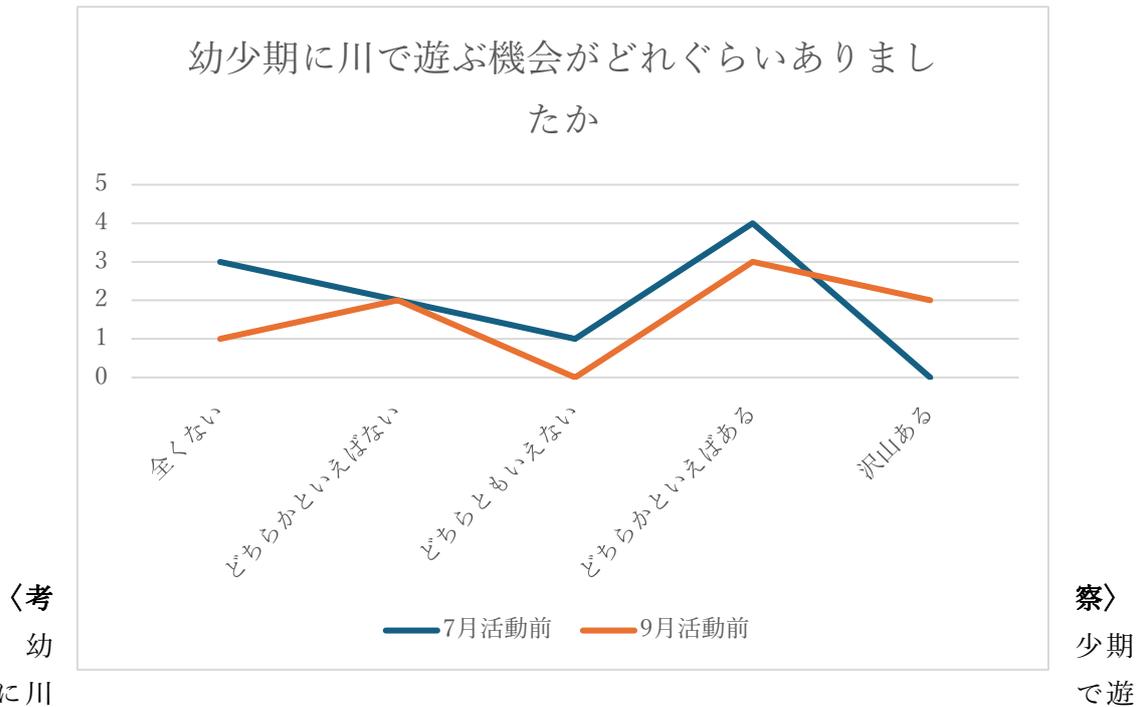
今回、活動時期を変えて2回活動を行い、見られる生き物の違いを知ることも1つのテーマとしていたが、見られた生き物にあまり変化が見られなかった。また、保護者アンケートでは、集計できたデータが少なかつたため、比較することが困難であった。

子どもたちの姿としては、振り返りで出てきたもの以外で釣りや仕掛けを使って魚を捕まえるなどの意見も出ていたため、今後近くの公園などに行って遊びの中で展開していきたいと考えている。

## まとめ

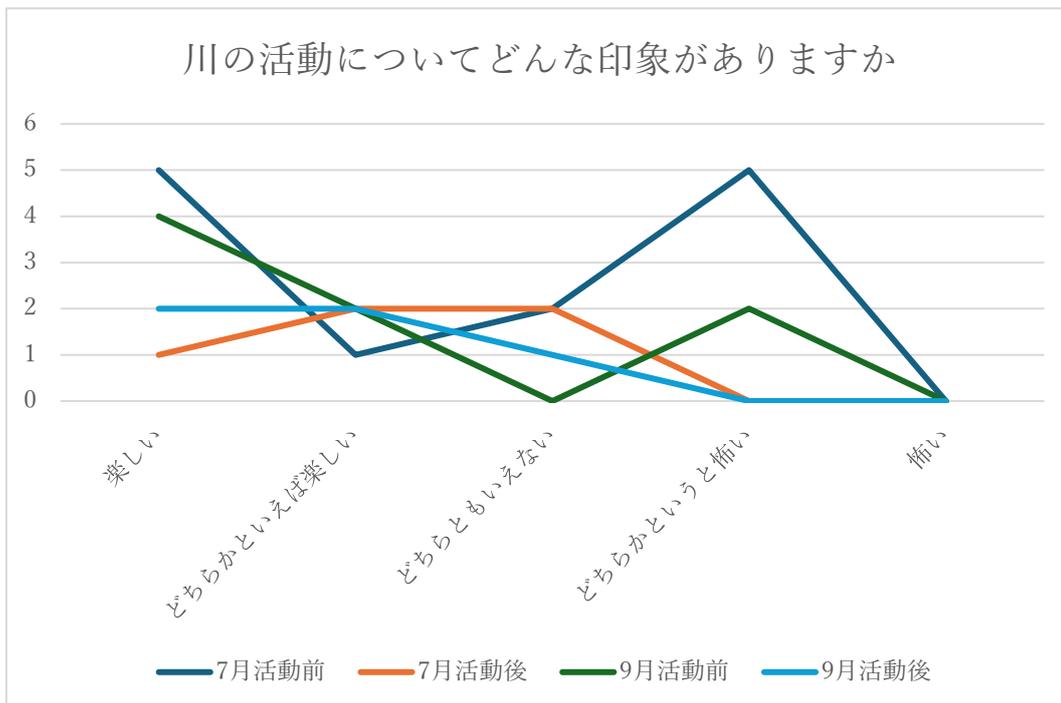
### 〈保護者アンケート考察〉

表1. 「幼少期に川で遊ぶ機会がどれぐらいありましたか」



ぶ機会がどれぐらいあったのかについては、7月も9月も「どちらかといえばある」が一番多かった。それに対して、7月の活動前は「全くない」「どちらかといえばない」が半数いたため、保護者の幼少期の河川での体験量は、半々だということが分かった。便利な世の中になり、川遊びのような自然体験の場が少しずつ減ってきているのではないかと考えられる。保護者の体験が少ないため、その子どもたちも必然的に自然体験の場が減っているのだろう。川遊びの体験をすることが難しい家庭が多いため、保育所やこども園での河川の活動は貴重な機会であり、子どもにとっても保護者にとっても学びがたくさんつまった活動になるのではないかと考えられる。

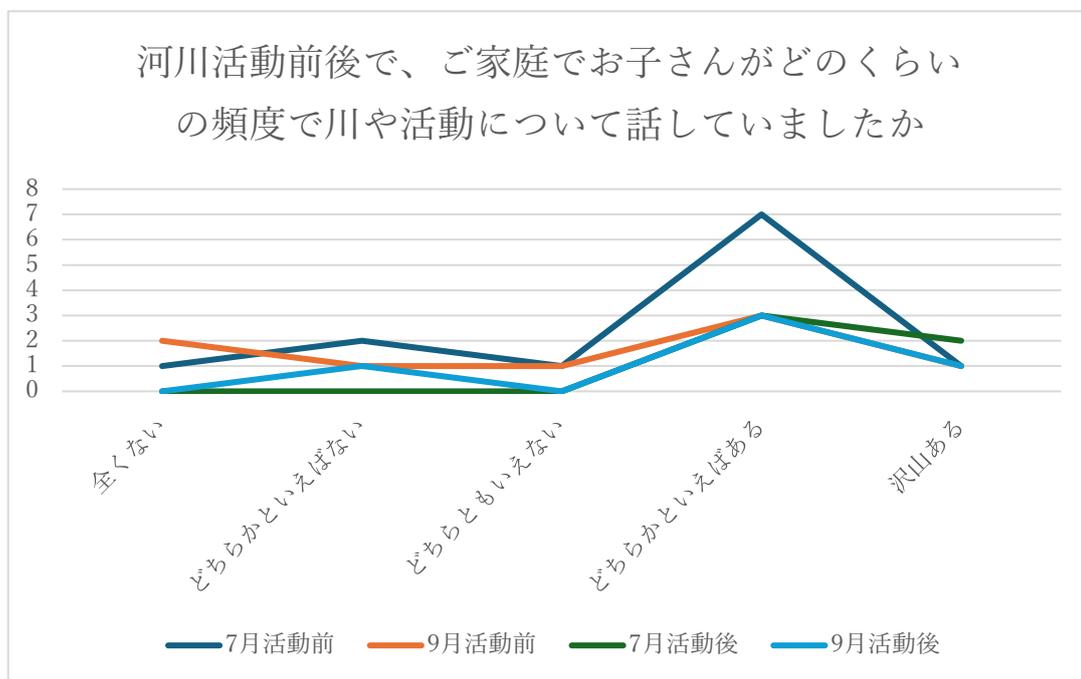
表2. 「川の活動についてどんな印象がありますか」



〈考察〉

7月の活動前は、川の活動に対して「楽しい」と「どちらかというと怖い」の印象が半々だった。実際に幼少期に川遊びを体験して「楽しい」という印象を持っている人がいるのに対して、体験が少なく、川の事故を見たりして「怖い」という印象を持っている人も多くいた。7月の活動後以降では、「楽しい」という印象に対して「怖い」が上回ることがなくなっていた。これは、子どもの話を聞いたり、子どもの川遊びの体験の様子を写真で見たりして楽しんでいる姿を見たことも関係しているのではないかと考えられる。

表 3. 「河川活動前後で、ご家庭でお子さんがどのくらいの頻度で川や活動については話していませんか」



〈考察〉

7月の活動前には、川や活動について話していた頻度が「どちらかといえばある」が1番多かった。活動前に家で川や活動について話す姿から、子どもたちは、初めての川遊びに対して期待を持っていた様子だった。7月の活動後以降も、「どちらかといえばある」が1番多くなっていることから、子どもたちから積極的に話すことが少なかった可能性があるが、保護者が問いかけると活動について話す姿が見られたのではないかと考えられる。川の活動が子どもたちにとって印象的であり、期待感のある活動であったため、家で話をする姿が見られたのではないだろうか。また、園で体験したことを自分の言葉で伝えるというアウトプットの機会にもなっていて、体験を経験へとつなげていくことができていたのではないかと考えられる。体験だけではなく、アウトプットをする場所があることも子どもたちにとってはとても重要なのだということが分かった。



質問2「ご家庭でお子さんは川の活動についてどのような話をしていましたか」

Kh コーダ図2

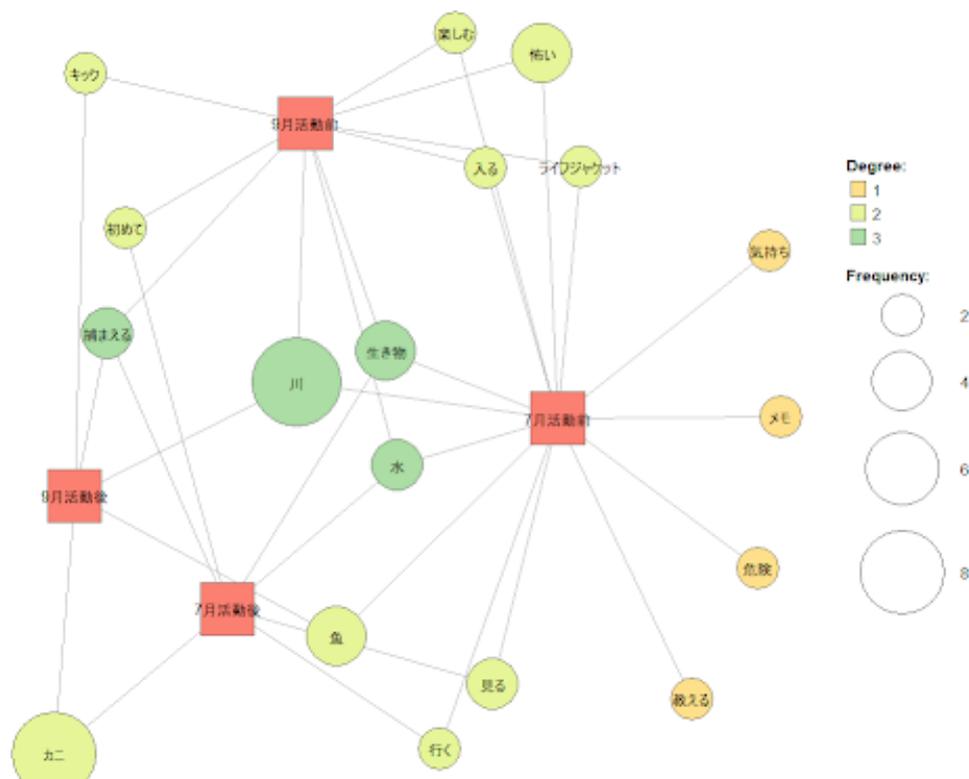


図2では、7月、9月の活動前には「ライフジャケット」や「怖い」などのワードが入っていた。活動前、ライフジャケットの着方やセーフティトークを繰り返し行っていたため、子どもたちの中でも記憶に残っていたのだと考えられる。また、危険性についても話をしていたため、「怖い」というワードが多く出ていた。活動後には、「カニ」や「魚」など見つけた生き物のワードが出ていた。活動前、怖いと感じていた子どもたちだったが、生き物の名前が多く出ていた結果を見ると、川の危険性だけではなく、川遊びの面白さにも気付くことができたのだと考えられる。

保護者の川に対する印象と、子どもたちの家で話していた内容を見てみると、どちらも活動前は「危険」や「怖い」などが多かったが、活動後は「楽しい」「安全」や具体的な生き物の名前が出ていたりなど、川遊びに対するイメージが変化していた。実際に川遊びを体験して面白さや危険性に気付いた子どもたちと、その様子を見ていた保護者であるからこそ変化があったのではないかと考えられる。この保護者アンケートからも川遊びの大切さがわかった。

表4. 子どもたちにした3つの質問と子どもたちの反応（7月と9月の比較）

【活動前】

質問	7月	9月
①どんな生き物が住んでいると思うか	カメ 魚 蛹 ザリガニ メダカ うなぎ カニ サメ 金魚 エビ マグロ クジラ マンボウ カエル イカ ヤゴ オタマジャクシ	カニ 魚 エビ カエル イルカ テナガエビ 猫みたいなカニ 蛇 シャチ セミ ウミヘビ ウーパールーパー カメ ザリガニ メダカ クロダハゼ
②この場所でどんなことができるか	・かくれんぼ ・泳ぐ ・もぐる ・イルカの真似 ・化石、宝探し ・魚探し ・浮かぶ ・石の上に乗る ・でんぐり返し	・泳ぐ ・プール ・水をパシヤパシヤする ・カニ探し ・潜る ・ゴーグル、シュノーケルをつける ・クロール ・バタ足 ・ふかふかキック ・浮く
③この場所の好きなところは	・川の中 ・水の中 ・橋があるところ ・トンネルがあるところ ・橋と町がつながっているところ ・森の中 ・石の下	・草があるところで生き物探し ・カニがいた草のところ ・水の中に魚がいるところ ・きれいな砂があるところ ・水の中

【活動後】

質問	7月	9月
①どんな生き物が住んでいると思うか	ベンケイガニ テナガエビ クロダハゼ 魚 鳥 蝶々 タニシ ハチ アメンボ 赤虫 水中昆虫	魚 色々な大きさのカニ 紫のカニ 貝殻 (中がキラキラ、外が茶色) 水虫 小さいカニ
②この場所でどんなことができるか	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カニ探し</li> <li>・魚探し</li> <li>・エビ探し</li> <li>・カニの観察</li> <li>・泥の中で泡が見られる</li> <li>・茂みの中を探す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・泳ぐ</li> <li>・石を転がす</li> <li>・くるくる回る</li> <li>・カニ探し</li> <li>・クロール</li> <li>・魚を捕まえる</li> </ul>
③この場所の好きなところは	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カニがいるところ</li> <li>・石の下</li> <li>・水があるところ</li> <li>・石がたまっているところ</li> <li>・魚がいたところ</li> <li>・石の形</li> <li>・泥の中</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・茂みの中</li> <li>・きれいな砂</li> <li>・水の中</li> <li>・カニがいるところ</li> <li>・ぶくぶくしているところ</li> </ul>

### 〈3つの質問の総合考察〉

3つの質問に対しての子どもの反応、気付きなどを7月と9月で活動前後をそれぞれ比較した。活動前は、7月では自分自身の体験や知識から話をしていたのに対して、9月は自分が知っている生き物の名前を出す子もいたが、7月の活動で見られた生き物を思い出しながら話す姿があった。子どもたちにとって7月の水辺での活動はとても魅力的であり、印象が強かったのだとまた、「好きなところはどこか」という質問に対して、7月はなかなか答えが出なかったり、不安そうに答える姿があったのに対して、9月はそれぞれが自分の好きなところを楽しそうに話す姿があった。実際にその場に行って五感を使って遊び、様々な感情や発見に気付いたからこそ、子どもたちの中で好きな場所が見つかったのだと考えられる。7月の活動前の話し合いで自分の体験から話をしていたり、9月に7月の体験から話をする姿から、子どもたちにとって「体験」がとても重要であり、学びがたくさん詰まっていることが分かった。

活動後は、7月では見つけた生き物の名前を詳細に話す姿があったが、9月では、名前だけでなく大きさや色、形など生き物の特徴も話す姿があった。2回活動を行ったことで、同じ生き物を見つけても観察をする視点が違っていたり、2回目の活動でより細かく観察することができていた。また、活動から2週間後では、活動の振り返りをするだけでなく、次の活動に向けてのねらいを話している姿があった。活動の回数を重ねていくことで、「次にやりたいこと」が生まれ、より積極的に活動に参加することができたり、学びが深まっていくのではないかと考えられる。

### 〈全体の総合考察〉

7月と9月の河川活動を通して、視覚だけではなく五感全体を使った体験ができた。体験をして終わりではなく振り返りをしたり、日常の会話の中で継続的に話をしたり、遊びの中で活動がつながっていくことで、子どもたちにとって記憶に残る体験となり、経験へとつながっていくのではないかと。また、2回の活動を行ったことで、子どもたちの中で次の活動への期待感やねらいが出てきていた。そのため、繰り返し体験することが、子どもたちの学びを深めていくのだと考えられる。

そして、活動を通して河川活動の面白さだけではなく川の危険性についても学ぶことができたと考えている。子どもたちにセーフティトークをするだけではなく、実際に川に行き生き物に触れたり、水の中に入ったりしたことで危険性にも気付くことができた。危ないから自然遊びを行わないのではなく、危険性を知ったうえでどうしたらできるのかを考えていくことで、自然と共存することができ面白さにも気付くことができるのだと考えられる。

## 西水元水辺の公園

今回の活動は、隣接する中川とつながるワンド内で活動を行なった。

公園に隣接する中川は、埼玉県羽生市に源を発し、大落古利根川、新方川、元荒川、大場川など多くの河川を集めて南下し、東京都葛飾区高砂で新中川を分派する。(国土交通省「日本の川」)

## 活動実施場所



## 公園内地図

